

## 「ファイサル国王研究センターとのワークショップを終えて：サウジの内政・外交の変化」

中東・イスラム事業グループ 研究員

横山 隆弘

### 1. はじめに

2017年5月15日、笹川中東イスラム基金事業室は、サウジアラビアのシンクタンク、ファイサル国王研究センターの招待を受け、「2030年に向けたサウジー日本研究者対話」と題したワークショップに参加しました。本コラムでは、開催に至った経緯、ワークショップの概要を紹介するとともに、サウジアラビアが内政・外交において急速な変化を遂げる中、当財団がその変化をどのように受け止め、関係を構築していくかにつき考察します。

### 2. ファイサル国王研究センターでのワークショップ

#### (1) ファイサル国王研究センター

冒頭に述べたとおり、当基金は、サウジアラビアのシンクタンク、ファイサル国王研究センターの招待を受け、「2030年に向けたサウジー日本研究者対話」と題したワークショップに参加した。ファイサル国王研究センター（The King Faisal Center for Research and Islamic Studies/KFCRIS）とは、1983年にファイサル財団により設立された研究所で、第3代ファイサル国王の遺志を受け、アラブ・イスラムの伝統が次世代に尊重・継承されることを目的に、イスラム文化・教育に関わる各種研究と社会への普及を行っている。具体的な活動としては、イスラム教の文献の保存、センター研究員による研究論文・書籍の出版、国際会議の開催や研究者間ネットワークの構築などがある。また2013年には研究部門が設置された。主な研究ユニットは、アラビア語、サウジ研究、現代政治思想、イラン研究であるが、過激派に参加した女性に関する研究など、特色のある研究を行っている。サアド・サルハーン事務局長や一部研究員と面談を行い、活動紹介を受けたが、個別の研究員のテーマを尊重し自由な研究環境を確保しているといった印象を受けた。

続いて、5月のワークショップ参加に至るまでの経緯について触れたい。当基金はこれまで同センターとコンタクトを持っていなかったが、2016年7月、日本外務省を通じて、上述のサルハーン事務局長一行より、訪日に際し当財団を訪問したいとの依頼をいただき、初めて面談を行った。年が明けて2017年の1月、同センターから、「日本－サウジ関係とサウジアラビアにおけるジェンダーに関するワークショップを開催する予定だが、中東イスラム基金からも参加いただきたい」と招待を受け、辰巳雅世子室長と報告者が出席するに至った。なお、日本からは、辻上奈美江・東京大学特任准教授（中東地域研究、ジェンダー論）、武藤弘次・中東協力センター主査が参加し、発表を行った。

## (2) ワークショップ「2030年に向けたサウジー日本研究者対話」

ワークショップ「2030年に向けたサウジー日本研究者対話」は、5月15日に、ファイサル国王研究センターの会議室にて行われた。参加者は、日本側からは、大使館、JETRO、中東協力センター、日本企業の現地事務所関係者が、サウジアラビア側からは、諮問評議会議員、現地企業関係者など合わせて30名ほどが参加した。ワークショップは、サルハーン事務局長、辰巳・中東イスラム基金室長が開会挨拶を行った後、大森摂生・駐サウジアラビア日本公使、ソラヤ・オベイド元諮問評議会議員・元 UNFPA 事務局長がキーノート・スピーチを行った。

続いて、第1セッション「地域・国際政治とサウジ・日本関係」、第2セッション「サウジアラビアにおける女性のエンパワーメント」が行われた。第1セッションでは、米国が関与を低下させる中での中東域内の勢力変化、第二次大戦後の日本・サウジアラビア関係の変遷に関する発表が行われた。第2セッションでは、サウジアラビアにおける女性の社会進出の取り組みと沿革、明治以降の日本における女性の社会的地位に関する発表がなされた。

全般的に、闊達な議論が行われたが、女性参加者の議論への参加が顕著であった。特に印象に残ったのは、ソラヤ・オベイド氏と第2セッションの発表者を務めたホダ・ヘライシー氏である。オベイド氏は、国連人口基金の事務局長、日本の国会にあたる評議会議員を歴任した女性であるが、国際的に活躍するサウジ人女性の草分けとしての気概を感じることが出来た。他方、ヘライシー氏は、若手の評議会議員であり、女性の社会進出に関する国連の取り組みに精通していた。また随所に二人の間の信頼関係が窺え、オベイド氏が切り開いた社会進出をヘライシー氏の世代が受取り、発展させようとしているように思われた。

今後の日・サ関係については、(1) これまでやはり石油資源を通じた経済関係が中心、ビジネス以外の文化面での交流が必要、(2) 日本のアニメはすでに知られている、アニメ作品等を通じた相互理解が重要、(3) 書籍の日本語、アラビア語への翻訳を増やし、互いの文化について知る機会を増やすべきといった意見が出た。ワークショップ全体では、従来のようにビジネス分野に限らず、日本とサウジ社会の特に文化面における相互理解を深めるべきであるとの結論に至った。

このように、当基金としては、昨年7月のファイサル・センターから当財団への突然の連絡がきっかけとなり、今回のワークショップ参加に至った。ファイサル・センターによれば、昨年の訪日以降、当財団と中長期的な関係構築を行いたいと考えてきたとのことである。しかし、なぜこのタイミングで日本の民間財団である当財団に声がかかったのだろうか。ほぼ同じ時期に発表が行われた、サウジアラビアの内政上の変化を象徴する「ビジョン2030」に触れながら考えてみたい。

### 3. 「ビジョン2030」

サウジアラビア政府は、2016年4月、経済改革計画「ビジョン2030」を発表した。ムハンマド副皇太子（当時）が中心となって取りまとめたプランで、石油収入に依存しない経済実現のための理念を表明したものである。プラン策定の背景には、2014年夏以降、油価の下落が続き、抜本的な財政・経済対策を取る必要に迫られていたことがあると指摘される。対策の柱としては、国有石油会社サウジ・アラムコの株の一部上場を通じた投資ファンドの設置、民間とりわけ中小企業の育成、イスラム教の聖地メッカ、メディナへの巡礼者の3000万人への増加、文化遺産を含めた観光開発、女性のエンパワーメントの拡大、文化・エンターテインメント産業の振興など意欲的な改革案が示されている。この改革案に対し、野心的ではあるが具体性に欠けるとして、その実現性を疑問視する意見もあるが、2016年5月には、大幅な省庁再編と内閣改造を実施、翌6月には、担当省庁ごとの数値目標を記した「国家変革計画2020」を発表するなど、「ビジョン2030」に沿った改革の実現に向け矢継ぎ早に政策が発表されており、現サルマン体制の真剣さがうかがえる。しかし他方で、女性の社会進出や、文化・エンターテインメント産業の振興は、今後、宗教界や保守的な人々の反発を招きうる大きな変革である。また、各省庁は、数値目標達成に向け、かなりの緊張感を強いられているとも聞く。一連の改革を主導するムハンマド副皇太子は、2017年6月、皇太子に就任したが、ビジョン2030の成功は、自身の基盤確保の観点からも極めて重要な課題であろう。

#### 4. サウジアラビアの対日本・対中国接近

2016年9月と2017年3月に、それぞれムハンマド副皇太子（当時）とサルマン国王が訪日したが、「ビジョン2030」への協力は重要な議題の一つであった。

ムハンマド副皇太子（当時）は、2016年8月31日から9月3日にかけて、日本を訪問した。9月4日、5日に中国で開かれたG20首脳会議に参加する途上での訪問であったが、副皇太子として初めてのアジア諸国公式訪問でもあった。日本では、天皇、皇太子との会見、安倍首相との会談等が行われたが、副皇太子は「ビジョン2030」に対する協力を求めた。これを踏まえ、閣僚級会合である「日・サウジ・ビジョン2030共同グループ」を立ち上げ、双方の協議の下、二国間協力の基本的な方向性と具体的なプロジェクトのリストを盛り込む「日・サウジ・2030」を策定することが発表された。第1回閣僚級会合は、2016年10月にリヤドで開催された。

続いて、2017年3月には、サルマン国王が、約1か月にわたるアジア諸国歴訪の一環として日本を訪れた。国王としては1971年のファイサル国王以来46年ぶりの来日となる。この機会に第2回閣僚級会合が開かれ、「日・サウジ・ビジョン2030」が合意された。エネルギー、娯楽、医療、インフラ、投資といった9分野での二国間協力の他、サウジアラビアでの経済特区の設置や査証発給の円滑化といった経済活動を促進する方策が盛り込まれた。このように、サウジアラビアが日本に対して「ビジョン2030」実現のための支援を求めるのに対し、日本政府は全面的に協力する体制を整えて要請に答えている。

他方で、サウジアラビアは、中国との関係強化も図っている。サルマン国王が 3 月に訪中した際には、製油所・石油化学プラント建設や石油化学プロジェクトの実施など、エネルギーや宇宙分野で、総額 650 億ドル規模の合意が結ばれたとされる。

サウジアラビアにとり、このような日本と中国との関係強化は何を意味するのであろうか。1 つは、サウジアラビアの主要輸出品である、原油の輸出先の確保も重要な課題である。日本と中国は、サウジアラビアにとり最大の輸出品である原油の主要な輸出先である。日本は、原油の約 3 割を同国から輸入している。他方、中国は、サウジアラビアにとり輸出入ともに第 1 位の最重要貿易相手国である。サウジアラビアの国家歳入の 6 割強が、石油収入とされる。米国のエネルギーの対中東依存が低下する中、最大のエネルギー消費国中国と、資源に乏しい日本は自国原油の重要な消費国である。他方で、石油以外の産業の振興を図る「ビジョン 2030」への具体的な協力の取り付けも課題である。ムハンマド皇太子は、日本、中国のみならず、世界各地で「ビジョン 2030」への協力を求めているが、両国からの支援ならびに投資の増加は、自身のイニシアチブへの大きな後押しとなるだろう。

このように、「ビジョン 2030」を一つの軸としながら、サウジアラビアは、特に 2016 年 9 月以降、日本、中国との関係拡大に努めている。他方で、ファイサル国王研究センターは、これと軌を一にするかのように、とりわけ昨年後半より、日本と中国の研究機関・シンクタンクとの関係強化に取り組んでいる。中国とは、北京大学を中心とした中国の研究者との交流を行っており、今年 4 月には、センターで「GCC と中国：戦略的パートナーシップに向けて」と題したワークショップを開催している。

もちろん同センターの活動目的は知的交流である。また、サウジアラビアと相手国との相互理解といった文化的・学術的性格のものであり、主に経済関係の協力関係を主眼とする「ビジョン 2030」とは一見互いに無関係な活動に見える。しかし、「ビジョン」は、観光の促進、文化・エンターテインメントの重視、人材育成といった幅広い分野をも含みこむものであり、ファイサル・センターのシンクタンク・学術機関との知的交流事業は、「ビジョン」に書かれた理念と呼応する活動と言って過言ではないだろう。

## 5. おわりにかえて

先に触れたとおり、昨年 7 月に、「突然」ファイサル国王研究センターから連絡があり、同センターとのコンタクトが始まった。しかし、「3」で見たとおり、より大きな文脈では、サウジアラビアが脱石油化に向け「ビジョン 2030」に象徴させながら、改革に乗り出している。その協力先として日本、中国との関係強化の動きが同時並行で起こっていることが指摘できる。5 月のファイサル・センターでのワークショップの開催もこうしたサウジ国内の変化と、日本、中国とのさらなる関係強化といった大きな文脈の中で捉えることが出来るよう。

ワークショップでは、日本とサウジアラビアの主に文化面での相互理解の促進が、参加者が同意した一つの結論であった。結論としては決して新しいとは言えず、ともすると、

日本とサウジアラビアの地理的・文化的な遠さを改めて感じさせる議論ではある。しかし、日本と中東の相互理解を設立趣旨とする当基金としては、道のりは遠いもののまさに取り組むべき課題である。

当基金にとり、サウジアラビアとの交流事業は新しい分野である。同国の政治・経済・社会・文化につきこれから知るべきことが多い。ファイサル・センターは、今秋に訪日を予定しているが、その一環として、当基金では、同センターの研究員を囲み、石油の発見がもたらしたサウジ社会の変化をテーマに意見交換を行う予定である。サウジ社会の変化を日本人である我々がどう理解したらいいか、日本にも過去似たような社会の変動はなかったか、このようなアプローチでサウジ社会の一端の理解に努めたい。

現在、ムハンマド皇太子のイニシアチブの下、急激な速さで経済・社会改革が進んでいる。30歳以下が国民の過半を占めるサウジ社会がどのような変化を遂げるか、その大きな変化をどのように理解したらよいか、また日本社会がどのような側面に関わっていけるか、このような問題意識を念頭に、事業作りを行いたいと考える。